

昭和65年2月1日第1種郵便物認可  
平成16年10月1日発行(毎月1回)1頁発行  
俳句雑誌 第15巻第10号

俳句雑誌「おき」

沖

10  
月号



沖  
発行所

PDF 制作

俳誌の salon

# ミリメートル

林 翔

## 選ばれた句

第七句集『光年』は私の最後の句集ということもあって、それまでよりやや多くの方々に贈呈したから、礼状も随分多く来ている。礼状の中には、その人の好きな句を書き抜いて下さっているものも多いので、どの句を何人ぐらいの方が採って下さっているのかと調べてみた。

今日（八月二十六日）現在の最高点は21点で、

光年の中の瞬の身初日燃ゆの句であった。開巻劈頭の句でもあり、書名もこの句によっているのだから、当然でもある。

二席は11点で、

九十段登りてうれし春の風の句。これは句集末尾の句でもあるが、一つには著者の卒寿を祝って下さる気持もあつてのことだろう。

三席は8点で、

夜の風鈴月の言葉と言ひつべく、  
四席（7点）の句は三句あり、

天高し何耗減りしわが身丈

葉を揺らす初秋かぜよ身にも来よ

虫の音や風速ゼロの夜を揺らし

月に雲地に狂ほしき恋の唄

蝸や玻璃戸閉めても声そそぎ

とうすみの翅透くよああ吾が胸も

風そよぎ恋の落蟬向かひ合ひ

父の代の明治の味か山葡萄

冷水をごくんと夏が過ぎる音

「お転婆」は死語となりけりアテネの夏

耳鳴りは宇宙の音か月冴ゆる

やはらかに生き熱く生き雑煮餅  
われもまた色なきをどこ秋の風

七席（6点）の句も三句あり、  
交友七十年遂に君逝く青葉雨

この若き心を映せ冬鏡  
ストローを細き涼気の昇りゆく

交友七十年の友が登四郎氏だとい  
うことは、すぐわかるであろう。

十席（5点）の句も三句あり、  
寝ることのさびしさ知るや寝正月

ふと踏んで瞬の童心霜柱  
和紙といふ真白きものよ冬用意

の句々であった。  
取り上げて頂いた句を数えたら、

二四九句もあった。有難いことだ。

林 翔



# 父祖の地

能村 研三

## 月山に登る

陶窯の千度の火焰涼しかり  
はまなすは浜の微風に実をつけし

小判草遼空墓所のみほとりに

父偲ぶいとも露けき能登の旅

九月十一日、十二日に山形の藤島町で行われた「土田竹童顕彰全国俳句大会」に招かれた。山形県といっても、「沖」の山形支部がある河北町は山形新幹線で行くが、ここは新潟から羽越線で約二時間、途中村上からは車窓に日本海の海に浮かぶ飛島を見ながらの行程で、反対側には出羽富士と呼ばれる鳥海山の端麗な姿も見ることができた。鶴岡の駅には阿部月山子さんが出迎えてくれた。阿部さんは「春耕」の主要同人でいつも俳壇のバーティでお会いして親しくしていただいている方だ。鶴岡の町を散策のあと、月山の八合目まで車でご案内いただいた。月山はこれまでは河北町、山形市側から見ていた山だが、庄内側から見る姿も美しい。芭蕉が「奥の細道」で雲の峯幾つ崩て月の山と詠んだ所で、山伏たちの修験場として尊崇されてきた。

玫瑰や祭祀ゆかりの寺家の名に

釈迦空の句碑

御祭風入らずの森に句碑ありて

楯一樹もて緑蔭を封じたり

釉葉が炎昼鎮め能登瓦

土用あい詩潜みぬる気多の海

夏果ての海群青の蛭屋裏

八合目から木道を歩いて散策したが、秋の訪れが早いのか高山植物は、見ごろを少し過ぎていた。阿部さんは、地元の方なので、多くの高山植物の名をご存知で、普通の人が行かないような行者道にも案内して下さった。昔芭蕉は何合目かまでは馬を使ったようだが、月山の頂上まで登り、行場にまで降りていったというから、その健脚ぶりにも驚かされた。

月山の行場はすでに霧ごめに 研三  
月山を下りると、夕方になってしまったが、羽黒山の五重塔を見せていただいた。森閑とした杉木立の中に聳える三層の檜皮葺、その素朴さがかえって重厚な感じを醸し出していた。冬は雪で閉ざされるというが、杉木立に囲まれた五重塔が雪を被った幽雅な姿を想像し、今度はぜひ冬に訪れたいと思った。

能村研三



# 蒼茫集



下 見 久染康子

葭切の骨組荒き浮巢かな  
地底より原始の息吹蓮ひらく  
花蓮田めぐり黄泉路の下見めく  
生き残りの都電熱風塗れかな  
裏窓の簾を揺らし荒川線  
投げ込み寺蟬棲む大樹残りけり

密 書 都筑智子

月下美人密書ほどくを待つに似て  
世に在らば涼しき佳人幽霊図  
仮の世の夢の汀に籠枕  
逝く夏やうなじに巻毛跳ね上げて  
白桃や五指うつとりとしたたらせ  
夏瘦の横顔そして白ワイン

風の繰り言 柴田雪路

倦まず聞く風の繰り言含羞草  
木偶の首かくりと折れて今朝の秋  
顔にまだ洒落つ気のこし生身魂  
身を振りひらく朝顔風の撫づ  
願ひごとと多く七夕竹撓ふ  
逢ひにゆくこころの隅の緋のカンナ

喜 寿 湯橋喜美

明日満つる月かも喜雨のあとを出て  
日照雨ほどの気狂ひ喜寿を過ぐ  
一病をゆるめて灘の冷し酒  
夜蟬鳴く眠られぬ師の魂かとも  
夏の月身を泳がせて昼拭く  
溺愛のペンの大文字夜の秋

# 潮鳴集

百万の毛穴

島崎省三

次々と月を転ばす踊の手  
妣在すや芋殻の烟ふつと揺れ  
魂迎ふ今宵高野の香薫きて  
八難を超えてきし艶生身魂  
百万の毛穴ありけり油照り

からすうりの花

清水公治

漁止めて海を背中夕端居  
夕闇をひと網からすうりの花  
炎帝へ恭順の歩をゆるやかに  
電柱の影に先客真炎天  
真炎天悟りきつたる顔になり

花蓮

関洋子

花蓮水しぶきして生まれけり  
揮発して吾が影もなし油照り



寝ころべば身体は山河涼気生る  
命終のあかるし龍舌蘭の花  
学童疎開の彼の地を訪はな終戦日

走馬燈 宮本啓子

鷺舞ふやそろそろ稲の刈支度  
温室明り消え潮騒と夏の月  
暮れてなほ大地の火照り盆の月  
夕涼の田に添ひ町の本屋まで  
節目なきもののさびしさ走馬燈

粥のなき国 白井剛夫

甚平を風のすり抜け江戸切子  
山女釣る瀬音に声の掻き消され  
子のこころ読めぬとまどひ遠花火  
粥のなき国に来てをり水巾着  
蟬声に目覚めふるさと発つ朝

# 沖作品



## 能村研三選

市川市

栗原 公子

滔滔と地球を被ふ青葉潮  
月光もあみこみ烏瓜の花  
万緑に染まり山彦帰り来る  
ジャズ低く流し一人の避暑ごち  
ポスターの目に見詰めらる巴里祭  
海を見に来て峰雲の虜かな

東京

高木 嘉久

峰雲を描きて白帆の置きどころ  
夏蝶の拋物線で去りしかな  
炎天や走れば乗れるバスの距離  
大西瓜次の電柱まで右手  
網が出て少年が出る木下閣

千葉

林 昭太郎

こめかみの一瞬昏し氷水  
昼寢覚テレビが鍋を売つてゐる  
冷蔵庫開けて眠れぬ顔点す  
長男の背丈肩幅夏旺ん

東京

坂 ようこ

夜祭に齡を捨ててきたりけり  
東京を沖より見たり敗戦忌

さみどりの茹で汁こぼし夏惜しむ  
玻璃破片散りて晩夏の交差点  
狼籍のごとく蔓へ蓮見舟  
人生はB面こそと金魚玉  
ファイヨルドへ稜線なだれ雲の峰  
白夜かなムンクの叫び聞こえさう

市川市

内山 照久

成田まで白夜をまとい帰国せり  
九十九里裸足に地温ありにけり  
広重の斜めの夕立浴びてみたり  
庭下駄のみな海へ向き遠花火  
秋の蝶遊女たゆたふ姿かも

東京

工藤 進

星月夜岩で人魚を待とうかと  
敗戦日といふ壮大なゼ口ありき  
とんぼうの眼の中に見る宇宙かな

神奈川

菅原 健一

言葉だけ生き残りしや原爆忌  
秋立つといふ淋しさをまだ知らず  
噴水の力の束を解きにけり

茨城

今瀬 一博

垣越えて国ぬけのごと凌霄花  
薄明の朝顔星と交歓す

長野

矢崎すみ子

大花野風の Rond となりにけり  
炎 天や棘の 鋭き 枝 払ふ  
風 入れや心にもある 畳 皺

千葉

鈴掛 穂

朝あをき空気に濡れて蟬の羽化  
眉 けぶる 王朝 絵巻 ねむの 花  
蓮 開く 古代の 息を ふつと 吐き

東京

小嶋 洋子

星空を湖水にゆだね避暑地去る  
人 遠く 夕ひぐらしを 聴き ぬたり  
離 陸機が 光に 変はる 雲の 峰

千葉

佐々木よし子

愛さるとは遠雷を聴くごとし  
波 しぶき 上ぐる 船首や 虹 立てり  
T シャツに 何処の 夏草 つけて 来し

只 風 鈴 鳴つて 天水 暮し かな  
虹の 橋十勝 平野を ひと 跨ぎ  
船虫 四散 己が 影すら 持たず

蜘蛛の 囿に 化粧の 貌を 剥がさるる  
ネクタイの 要らぬ 日々なり 巴里 祭  
招魂の 音響 かせて 那智の 滝  
銀紙の 皺の 陰影 原爆 忌

深田 雅敏

あかつきの 稲の 切つ 先露の 玉  
峰雲を 揺り 起し ぬる 触れ 太鼓  
水 無月の 砂丘 かすかに 星 湿り  
虹 立ちて をと この 埒の 二重 三重  
涼 新た 筆の ちから の 定まり て  
華 やぎに いっし か 疎し 遠花 火  
漬 茄子の 色 賞め られて より 多弁  
マン ションの 傾む ける やも 大早  
長崎 忌水 押し あてて 顔洗 ふ

神奈川

中尾 公彦

東京

辻 尚子

### 新人賞予選句（十月）

万緑に 染まり 山彦 帰り 来る  
海を 見に 来て 峰雲の 虜 かな  
網が 出て 少年が 出る 木下 闇  
東京を 沖より 見たり 敗戦 忌  
狼籍の ごとく 蔓へ 蓮見 舟  
九十九里 裸足に 地温 ありに けり  
敗戦日 といふ 壮大な ぜ口 ありき  
噴水の 力の 束を 解きに けり  
朝あをき 空気に 濡れて 蟬の 羽化  
蓮開く 古代の 息を ふつと 吐き

栗原 公子

高木 嘉久

林 昭太郎

坂 ようこ

内山 照久

工藤 進

菅原 健一

今瀬 一博

矢崎すみ子

鈴掛 穂

# 沖作品 選後句評

\*  
能村研三

万緑に染まり山彦帰り来る 栗原 公子

栗原公子さんはこのところ急速に成績をあげてきた人。8月の中央例会では掲出の句が林翔先生の特選に、「月光」の句が私の特選、さらには総合得点も一位となりまさに三冠王となった。「万緑」の句はスケールの大きな句である。「万緑」という季語は、「万緑叢中紅一点」から来ていて、単に表面的に緑に被われているというだけでは、その本旨に適わない。万緑の叢中に入ると、紅一点ではないが、自然の中の人間自身の小ささというものを改めて感じさせる。山彦は反対側の山々に人間が発した声が反響してもどつてくるものであるが、万緑という自然の生命力を湛えたおおらかさが、人間の声をも包み重厚な緑を含んだ音となって響いてきた。「月光もあみこみ烏瓜の花」の句は、私の特選句であったのでその評を参考にしてほしい。

海を見に来て峰雲の虜かな 高木 嘉久

高木さんも最近多くの句会に参加して熱心に勉強されている方であるが、いつも妥協を許さない独自の視点で俳句作りをされている方でもある。そんなこともあつて失敗する時も多かったが、最近では徐々にそのポイントが絞られてきたようにも思われる。「峰雲」の句、単純な構成の句であるが、この海も東京湾のような内海でなく、どうしてもその背景には大海原の太平洋の海が必要。海の大きさもさることながら、その海をも被い尽くすような峰の雲は何かそそり立つ山塊をも思わせる。海を見ることが目的であつたのだが、峰雲の形のおもしろさにすっかり魅了されてしまつた。「大西瓜次の電柱まで右手」の句、だれもが経験したことがあることを俳句にしたもので、思わず楽しくなつてしまう句でもある。

網が出て少年が出る 木下 闇 林 昭太郎

何か舞台での芝居の一シーンを演出しているような句にも思つた。補虫網が舞台の袖からは見えているものの、中々それを持つている人間が登場してこない。補虫網をもっている人は、どんな人なのだろうか、いろいろな想像させて観衆を焦らせる。舞台上であれば、それが演出であるのだが、そんな舞台構成をすっかり木下闇のある緑の森に移すと、それは演出でも何でもなく自然の成り行きのままの風景である。補虫網の真っ白な色合いが象徴的で一句を際立たせるのに成功した。「冷蔵庫開けて眠れぬ顔点す」の句、今年のような猛夏ならでは頷ける句で、何か人間の行動のおかしみも感じさせた。

---

入選一位 滴りの色 高橋あゆみ

滴りの色みどりなる信濃かな  
山小屋の楢垣低き遠郭公  
囀鮎雨後の千曲川の水の嵩  
てのひらを離れ螢火濃くなりぬ  
行き先を練つてゐるらし蝸牛  
指先に磁気のはたらく梅雨ぐもり  
湖底にも山河のありぬ青葉騒  
草茂る貸別荘の勝手口  
ブルーベリー帽子いつぱい摘みて夏



一瀑の天地つらぬく青  
湖面よりはじまる暮色涼み舟  
さつきまで夕日を浴びし髪洗ふ  
夕焼けて八ヶ岳連山の影の濃き  
日盛や汚れて湖の水位標  
蝉しぐれその只中にゐてひとり  
黄菅咲く朝の雫を蕊におき  
雨音の中に水音蓮の花  
青胡桃山のうしろに山の見え  
折りたたみ自在の帽子夏深し  
夏惜しむ手首に灰と時計痕